
そのままの君で

百合茶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

そのままの君で

【Zコード】

Z9544A

【作者名】

百合茶

【あらすじ】

新しく入ったマネージャー。あつちゃんはタイプらしいけど、彼女は多分違う人目当て。俺にとつては別にどうでもいいんだけど…想いに”偶然”なんてないから”共通”することは難しいよな…

(前書き)

前作『敗者の勝点』の一ヶ月前の内容となっています。ちなみに今回のは主人公はテル。前作を読んでなくても問題はありませんが、前作も読む予定なら、前作を先にする方を勧めます。

俺とあっちゃんは幼稚園からの付き合いで、小学生の頃からずっとサッカーをやつてきている。あっちゃんとは不思議なくらい共通点があつて、好きな物はカレーとサッカー、クラスは2年連続一緒だし、家は同じアパートで1階と2階の関係だ。ずっと一緒にだからお互いの事はよく分かっている。

そんなある日

放課後、部室へ向かう途中に、あっちゃんが見慣れないマネージャーを発見した。

「テル、見ろよ。物凄い美人！」

「ん？ マネージャーさん増えた？」

どう見ても3年生だよなあ。なんで今頃から…

「さつそくアピるぞ！」

「何をアピるんだよ？」

俺の問いが耳に入らなかつたのか、あっちゃんはもづ歩き始めていて、俺は慌てて後を追つた。

『谷口里美』さん。予想通り3年生。規定よりスカートが拳2つ分短い。

「俺の苗字と同じ『口』の字が…これはもしや『運命』？」

『森口敦』と『谷口…さん』。『運命』と言つよりも『偶然』に近いと思うけど…。そんな事より、マネージャーこれで4人だぞ。辞めた人も合わせたら6、7人…！

「テル？ 聞いてるか？ これは絶対…」

「これは絶対誰かにコクるな。」

「え…？ 俺をさしあいで先客がいるのか…？」

そう言つとあっちゃんは大袈裟にため息をついた。でもすぐに前を

向ぐ。どうやらターゲットを変えたらし。辺りをぐるっと見回して、ぴたりと動きを止める。

「じゃあ、あつちの一人…」

指さした方向には、キーパーを洗いながら楽しそうにお喋りをするマネージャーがいた。

「またマネ。しかも姉さん。^{アメ}」

「テル、最後のは余計だぞ。…優しそうで俺はイイと思'ナビ?」

「俺はあんまり…。」

「何だよ、それ。」

『何だよ、それ。』って言われてもなあ。

自分で分かれるよつた分からぬような…。

上手く説明できない。皆一様に制服を着こなし、そこから伸びる手足は綺麗な白なので、曲げられたスカートのウエストは華奢に映る。先輩たちと楽しそうに喋りながらも時々見せる女の子らしい仕草…。あつちゃんのよう口を開きにして眺めていてもいいのに、テレビを見ているような気分。

黙つていると、あつちゃんが俺の顔を覗き込んだ。

「お~い、テル? 日本語分かるか?』『あんまり』って何だよ、あんまりつて?』

「そのまんま。よく分からんけど、何かなあ…あんまり。』

「え~! ?はつきりしろよ。大体、テルつていつも曖昧だよなあ?」しつこい。いつもと変わらない、冗談を言つよつた軽い感じのあつちゃんだけじ、この時はなぜか鬱陶しく感じた。

「あつちゃん!』

「うん?』

「俺にだつてよく分からん事くら~いあるんだつ!~あつちゃんこそ鈍感です!~うあつしへて、名前の通り『厚かましい』んだよ!~俺はそのままくるりと背中を向けた。あつちゃんは…何も言わない。そのまま收拾がつかなくなつた俺は、

「先、行つといて。』

といい捨てて、元来た道を引き返した。

言い過ぎた。別にそこまで言つつもりじゃなかつた。なあ、分か
るだろ？つい勢いに乗つて口走つただけ…。

あつちゃんが黙つたままなんて、今までなかつたから、どうすれば
いいか分からない。

あつちゃんとは不思議なくらい共通点があつて、好きな物もクラス
もアパートも同じだ。ずっと一緒にだからお互いの事はよく分かつて
いるつもりだつた。でも、実際は分からぬ事もある。分かつても
らえない事もある。”共通”なんて”偶然”とそんなに変わらない
ものだ。それを引き合いに出して、分かつたつもりになつていただ
け…。

あつちゃんになんで苛立つたのか分からぬし、確かにちょっと鈍
感だけど『厚かましい』なんて、思つた事もない。あつちゃんは俺
の言つた事全てを真に受けてはいなうだ。

気付いたら教室の前まで来ていた。ここでもあつちゃんと俺は同じ
教室に席を並べている。

ガラツ

引き戸独特の音がやけに勢いよく響く。奥の方で人影が動いた。

「梨乃…。まだ居たのか？」

クラスメイトの石井梨乃が、電気もつけずに窓際の机に座つて外を
見ていた。俺が中へ入つても風に揺れる髪以外、そのままの体
勢でグラウンドを眺めている。

「なあ…」

「部活は？」

俺が問うより先に梨乃が鋭く訊いた。

「ああ…忘れ物取りにきただけ。」

とつせいでた嘘。やう、やめつとも思わない国語の宿題を取りにきただけ…。

「それよつさ、梨乃は何見てたんだ?」

「これ以上訊かれてたくないて、話題を切り変える。

「あのね…」

梨乃は咳きながらまたグラウンドに視線を戻した。

「あたし、マネージャー やるうかなーって思つてるの。」

「じゃあ、部活は…?」

「辞める。」

「なんで?」

俺は梨乃の隣まで来ていた。

「なんで、なんで辞めるんだよ?」

”夏季大会は先輩達と一緒にベスト4入りしたい。” って言つてたの、一体誰だよ?” やりたい事をやらないと学校来る意味ないよ。” と言つて、テスト休みでもこつそり自主練していた事も見ていたんだぜ。それを捨ててまでやりたい事かよ?

頭の中で沸々と生まれる怒りのような焦りが、疑問詞となつて駆け巡る。

バレーをやつてない梨乃是梨乃じゃない。

「あたし、もう駄目なんだよ。怪我してるもん。」

そう言つて、地面から宙に浮いた左足に皿を落とした。

先週、捻挫したと言う足首には湿布と包帯が巻かれている。

「それに…」

梨乃が別の理由を語るように、グラウンドに向かつてため息を洩らす。

「マネージャーなんか、やるな。」

とつたにそう言つていた。

「そんなの梨乃のキャラじゃないだろ。マネージャーってのは、タイム計つたりキーパー作つたり…」

語氣に熱が入つていて、何でもないよつて宙に皿を

向けながら冗談がましく付け加える。

「あー… キーパーって、ゴールキーパーじゃねえぞ？ 梨乃がゴール守つたら佐川の出番がなくなるからな。」

しかし梨乃是笑うどころか驚いたようだった。口を『え？』の形に

したまま一瞬沈黙が流れた。

「なんで… サッカー部つて分かつたの？ マネージャーなら野球もバスケも募集してるのに…。」

「それは…。」

言われてみればそうだけれど、心の奥では知っていた。梨乃が語ろうとした別の理由も、その言葉を無意識に遮った訳も分かつている。あの時俺は焦った。前から勘付いていた事を事実と認めるのが嫌だつた。あっちゃんが興味を持つて、俺が関心のない“谷口さん”。梨乃が彼女と同じものになるのを心の奥で拒んでいる…。

「とにかく、マネージャーなんて梨乃には無理だよ。」

梨乃の顔がさつと曇る。

…違う。そんな意味じゃない！

『いつも曖昧なんだよ』と言つた、あっちゃんの顔が思い浮かぶ。曖昧だから伝わらない。真つ直ぐ伝えたいけどそれができなくて、いつも空回り。面と向かうと言えない一言…。

「どんなに傍にいても、良く見せようとしたら、かえつて何にも分かつてもらえないもんだぜ。」

梨乃があっちゃんが好きな事くらい分かつてる。でもあっちゃんは気付いてない。想いに”偶然”なんてないから”共通”することは難しい…。だからこそ丁寧に伝えたい。そのままに伝えたい。

「足、さつさと治して復帰しろよ。バレーやってるのが梨乃なんだし。マネージャーなんかやつたら、俺…諦めるからな。」

「何を？」

息を吸つて一瞬肺に留める。胸の奥から生まれる熱で、空気は温まつてゆつくり出でていった。

「梨乃の事。」

梨乃の頬がさつと赤く染まつた。

「俺はまだ諦めたくない。梨乃が誰を想おもつとな。」

窓から風が入つて、梨乃の香りを運んできた。いつも傍で感じてたレモンライムの香り。

「いつから知つてたの？」

梨乃の想い人があつちゃんだと氣付いたのはいつだつたろ？

「そうだなあ。梨乃を好きになつた時には…。まあ、小学校時代からだな。」

「一途だね。」

「そつちもな。」

恥ずかしくて照れ隠しに笑う。何だかおかしくて、くすぐつたくて。

「テル！」

聞き慣れた声がして振り返るとあつちゃんがいた。

「何だよお。怒つてるとと思つたら楽しそうに…。」

あつちゃんがぐいっと袖を引っ張る。

「バスの相手がいないと部活できねえだろ。ほら、テル行くぞ！」

「お、おうー梨乃も部活行けよ？」

にっこり笑つて頷くのを確認して教室を出た。

そのままの自分でいたいから、俺は今日もボールを追う。

(後書き)

三角関係になってしまったね。

真っ直ぐ伝えたい、そのままの想いを伝えたいなら、自分を飾る必要なんてない。と言いつこと、どんなに共通点があつても、お互い分からぬ事は沢山ある。ということ。あっちゃんとテル（梨乃もか？）のストーリーはまだまが終らないのかもしれません。
最後までありがとうございました。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9544a/>

そのままの君で

2010年10月12日04時06分発行